

はじめに

何世紀も前の画家達を興奮させ議論をさせたであろう遠近法は、現代人の基礎的な教養から出発すれば理解の難しいものではありません。それに、必要とあれば美術、図学、製図、イラストレーション等の分野で遠近法について書いた本は豊富に手に入ります。遠近法という言葉は誰もが知っている。では遠近法を体系的に説明できるかと聞かれて応えられる人は意外に少ないのではないのでしょうか。遠近法は出来の良いクイズに似て簡単そうでも納得のいく答がすぐには見つかりません。絵画の技法として遠近法を説く本は絵画史上の事例や個々の応用例については盛り沢山でも系統だった説明はなくその原理の根底が見えません。図学や製図法の教科書は透視図の作図法（遠近法で用いられる図法）を詳細に説明するために、多くの原理は自明のこととして先を急ぎます。入門者にとってこれもまた木を見て森が‘見えない’感を拭えません。大して難しい話でもないはずなのに何故かすっかりわかったという気がしません。そんな状態で応用の情報が増えればその分また疑問も増える。このような困惑から抜け出そうと思い、著者は自分で考え自分の理解を構築することにしました。それが本書の発端です。入門者にとっては自明と思われる部分こそ説明が必要です。一旦、基本的な原理が理解できれば、個々の新たな知識も統一的な体系の中で理解でき、様々な応用も出来るようになります。そのような考えの下に、遠近法の図法を基礎的な部分から積み上げて描いて見ました。このようなアプローチはきっと入門者にとって役に立つものと考えます。本書は始めから順にお読みになることをお勧めします。用語も類書と違うものが出てきますから、定義の段階から読まれるのがよいでしょう。各ステップは甚だ単純で理解容易な内容です。

この冊子において「遠近法」は「透視図法」と同義です。製図やイラストレーションの場合は勿論、絵画についてもそう考えて間違いではないと思います。その理由は第1-1節「遠近法と透視図法について」に説明しました。

この冊子は大きく分けて次のような内容構成になっています：

(1) 透視図の基本則

透視図の原理とそれを描くために必要な基本的な法則を説明します。透視図法の実質は一本の直線の透視図を描くことから始まり、その先の議論の殆ど全部はそれから演繹的に引き出すことができます。

(2) 透視図の作図法

描く対象を平面図と立面図で表現して、それを透視図に描き出す作図法は建築透視

図の制作などに用いられます。透視図作成の基本的な技法とその特質について解説をします。その作図を通じて基本法則の理解も深まり平面の上に再現される遠近図の本質がよく理解できて応用力もつくでしょう。

(3) 透視図と視覚像の考察

透視図法を、視覚が認識した図形を平面上に再現する技法として見たときに、描かれた図形と視覚像とのずれが問題になることがあります。この章の記述は甚だ短いのですが、透視図法の問題点の根源を明確にし、それから発展する考えを考察します。図法の様々な相を考えることで遠近法の理解は更に深く豊かになるものと思います。

絵画のための遠近法の図形に関わる部分については、透視図法の基本則（第二章まで）と第六章の知識以上のものは不要でしょう。だが絵を描くのにそれを応用したいと思っても自然の風景や人体にその手がかりになる要素である直線や平面がうまく見つかるとは限らず、距離についても測量することができません。それでも、遠近法の原理について明晰な理解を持つことで形に対してより良い観察力と判断と勘が働くようになると確信します。また、今後透視図の図学や製図を学ばれる方には、先に全体の俯瞰図を持つことで実践技の理解と習得を早く深くかつ楽にする効用があるものと信じます。

(後略)